

平成18年6月学術講習会

(社)日本鍼灸師会
(社)東京都鍼灸師会

主催

厚生労働省後援 通算 654 回

(2006.6.25)

演題および講師

救命救急

「とっさのときの救急法」

熱中症と出血の対応

日本医科大学付属病院 高度救命救急センター

(日本医科大学大学院侵襲生体管理学) 助教授 横田 裕行

鍼灸治療編

「リウマチ・膠原病の経絡治療」

口内炎は膠原病のサイン

経絡治療学会 会長 岡田 明三

「とっさのときの救急法」

熱中症と出血の対応

横田 裕行

1. 熱中症の対応

人間の体は、汗をかいて余分な熱を体外に放出し、体温を調節しています。熱中症は、体内の水分が不足して十分な汗が出なくなり、熱が体内にこもって起こります。熱中症はその重症度によってⅠ度（熱けいれん）、Ⅱ度（熱疲労）及び

III 度（熱射病）に分類されます。最も重症度の高い III 度（熱射病）は死亡率も高く、また救命された場合も意識障害などの後遺症が残存します。

1) I 度（熱けいれん）

最も軽症で、汗と一緒に塩分が出ていって、体が塩分不足になることで起こります。脚や腹部の筋肉などが突っ張り、強く痛みます。塩分を含まない水分を大量に摂取した場合にも起こります。

2) II 度（熱疲労）

熱疲労は、熱けいれんよりやや重症です。多量の汗をかくことで体内から水分と塩分の両方が失われるのが原因です。疲労感、吐き気、めまいなどが起こるほか、血圧が低下して、顔色が悪くなり、顔面がそう白になることもあります。

熱けいれん、熱疲労の応急手当ては、風通しのよい日陰に楽な姿勢で寝かせ、スポーツドリンクなどで水分と塩分をこまめに補給させることです。吐き気があれば顔を横向きにしましょう。症状が治まらない場合は、速やかに医療機関を受診します。

3) 熱射病

最も重症で、死亡率も 60～80%と高率です。暑さで体温が上昇し、体温を調節する脳の働きが障害されておこります。体温が 40 以上になりますが、汗をかくことができないため、体内にますます熱がこもります。意識が混濁したり、昏睡に陥ったり、呼吸が停止するといった、極めて危険な状態になります。

意識や呼吸の状態を確認し、熱射病が疑われる場合は、大至急、救急車を呼びます。救急車が来るまでの間は、風通しのよい日陰に顔を横向きにして寝かせます。衣服を脱がせ、冷水や氷で体を冷やしましょう。

2, 出血の対応

体重の約 7～8%が血液です。したがって、体重 60kg の成人では約 5L の血液が体を流れています。その内、1L（血液全体の 20%）の血液が急速に失われると脈が早くなり、冷や汗をかき、気分が悪くなって顔面が蒼白になるなどの症状が出

始めます。さらに、1Lの出血が続くと（合計2L、血液全体の40%）生命の危機が迫ります。出血は少しでも早く止めることが重要な理由です。以下に止血の方法について解説します。

1) 直接圧迫止血

出血を見ると、誰でも慌ててしまいがちですが、落ち着いて対処することが必要です。出血部位がそれほど深くない場合は、傷口を心臓より高い位置に保ちます。傷口にガーゼやハンカチを当てて、その上から手で強く圧迫します。感染予防のために傷口を押さえる手に、手袋やビニール袋をすると良いでしょう。4分間を目安に圧迫して、それでも出血が止まらない場合は、すぐに医療機関を受診して下さい。

2) 間接圧迫止血

「傷が痛くて触れない」「傷口に物が刺さっている」など、傷口を直接圧迫できない場合に行います。薄手の布を約5cm幅に折りたたみ、傷口よりも心臓に近いところを縛ります。長時間圧迫し続けると、正常な部分の血液の流れも悪くなり、組織が傷んでしまうため、30分に1回は布を緩めます。

しかし、「高いところから転落した」「交通事故にあった」など高エネルギーが作用したと思われる場合には、たとえ目に見える出血がなくても頭蓋内、胸腔内、あるいは腹腔内に出血が起きている可能性があります。もちろんそれに付随した症状、たとえば意識障害、呼吸困難、腹痛や腹部膨満などの症状が出現します。このような場合は早急に適切な手当が必要です。すぐに医療機関に搬送することが重要です。

「リウマチ・膠原病の経絡治療」

口内炎は膠原病のサイン

岡田 明三

身体には臓器をつないだり、支えたりしている結合組織という部分があり、この結合組織の中を血管や神経などがパイプのように走っています。「膠原」とは、この結合組織や血管壁の重要な成分である線維タンパク質のことです。膠原病とは、この膠原線維に病変が生じたものです。膠原病には結合組織疾患、自己免疫疾患、リウマチ性疾患があります。膠原病では、結合組織の中でも、特に血管を中心として炎症が起こりますが、どの臓器も血管によって栄養を受けているため、血管の炎症が起こると、一度にいくつもの臓器に病変が起きてきます。また、過剰な免疫反応が起こり、自分の組織に攻撃を加えることも膠原病における臓器障害の原因になっています。このため、膠原病は、自己免疫疾患の範疇にも含まれます。そして、膠原病も関節が痛くなったり、腫れたりすることが多いために、リウマチ性疾患の仲間にも含まれます。その他類縁疾患にベーチェット病、シェーグレン症候群等があります。

東洋医学では筋肉の疾患ととらえます。そのために、脾胃の病と診ます。標治法としては灸を利用した温熱療法がタンパク変性を起こし消炎効果があります。本治法は脾胃の病証と診ます。炎症症状が主たる症候になるので、強刺激は避け、優しい治療をします。口内炎にはお線香による間接熱でタンパク変性を起こさせる方法があります。